
競合する尊敬語構文と 発話行為の割り当て

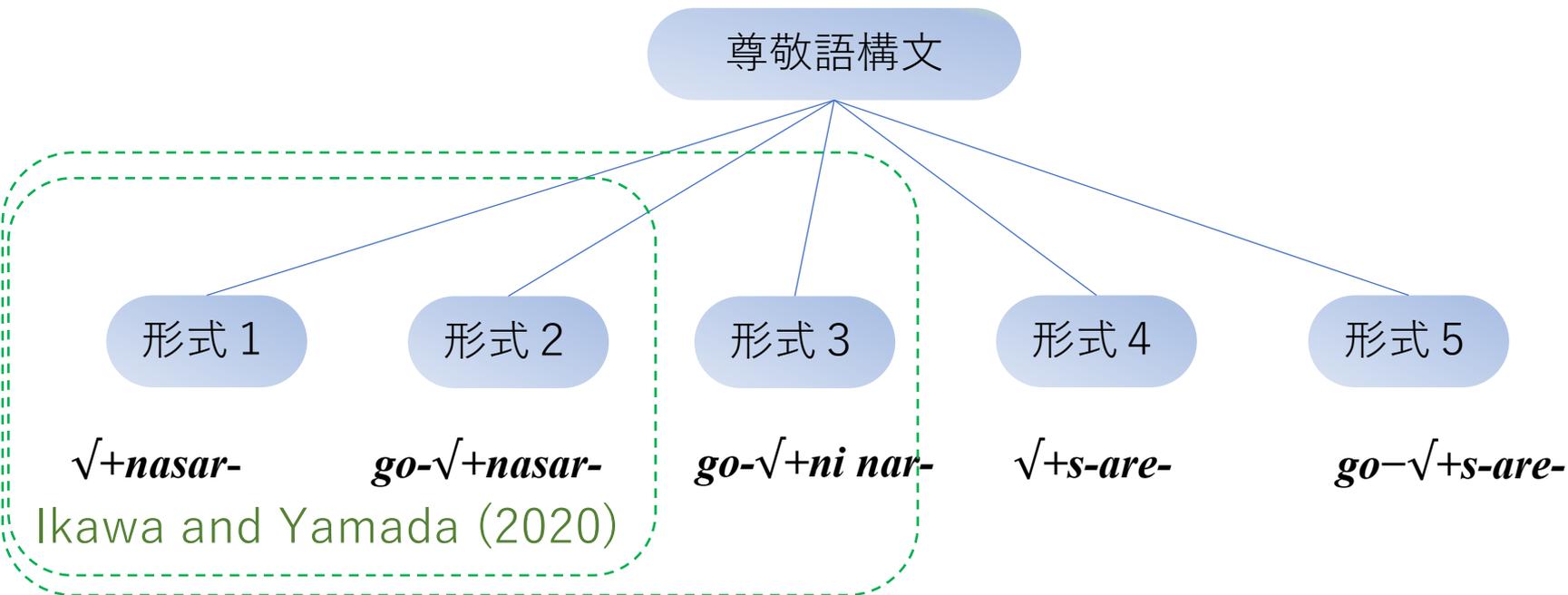
山田彬堯

第415回 LCCC研究会 Summer Special

日時: 8月17日 (月)

はじめに：日本語尊敬語の特異性

尊敬語構文



- (1)a. 先生が 到着 なさった。
- b. 先生が ご到着 なさった。
- c. 先生が ご到着 になった。
- d. 先生が 到着 された。
- e. 先生が ご到着 された。

はじめに：日本語尊敬語の特異性

Subject-agreementとしての特異性

尊敬語構文を持つ他の言語とは異なり、日本語の尊敬語には、述語形式に複数の形式が競合する。Agreeがもたらす現象としては例外的。

参考：Probabilistic Impoverishment Theory

(4) 標準英語（仮定法）

- a. If I **were** you, I wouldn't do that.
- b. If I **was** you, I wouldn't do that.

(5) Buckie (Nevins and Parrot 2010)

Paradigm of Buckie *was*-leveling (leveled forms **bold**, variants with %)

	<u>Singular</u>	<u>Plural</u>
<u>1st</u>	<i>I was</i>	<i>we was (%were)</i>
<u>2nd</u>	<i>you was (%were)</i>	<i>you was (%were)</i>
<u>3rd</u>	<i>(s)he was</i>	<i>they were (*was)</i>
<u>DP</u>	<i>a boat was</i>	<i>boats was (%were)</i>

はじめに：日本語尊敬語の特異性

Subject-agreementとしての特異性

尊敬語構文を持つ他の言語とは異なり、日本語の尊敬語には、述語形式に複数の形式が競合する。Agreeがもたらす現象としては例外的。

研究の長期的目標

目標：尊敬語の①形態・統語論と ②意味・語用論

例) 「なぜ」複数の構文が競合しているのか?



研究の中期的目標

「どのように」複数の構文が競合しているのか?



現在の研究

- (A) 「どのように」複数の構文が競合しているのか、コーパスから炙り出す
- (B) その特徴を説明できる意味論・語用論のモデルを提案・発展させる

はじめに：日本語尊敬語の特異性

今日の話の目的

- ・自己紹介：定量的な分析と定性的な分析の融合を目指す研究

現在の研究

- (A) 「どのように」複数の構文が競合しているのか、コーパスから炙り出す
- (B) その特徴を説明できる意味論・語用論のモデルを提案・発展させる

Section 1

尊敬語の選択についての定量研究

コーパスを用いた定量的な分析から
尊敬語構文の選択パターンを
丁寧に炙り出す探索的研究

Section I 定量的探索

理論言語学者としての期待

尊敬語構文の選択に影響を与える

①要因X, Y, Z, …と②その効果の大きさが詳しくわかれば

それぞれの尊敬語構文の特徴がよりくっきり見えてくるだろう。

その結果を見てから理論化を図ることでより綿密なモデルが作れるはずだ。

要因

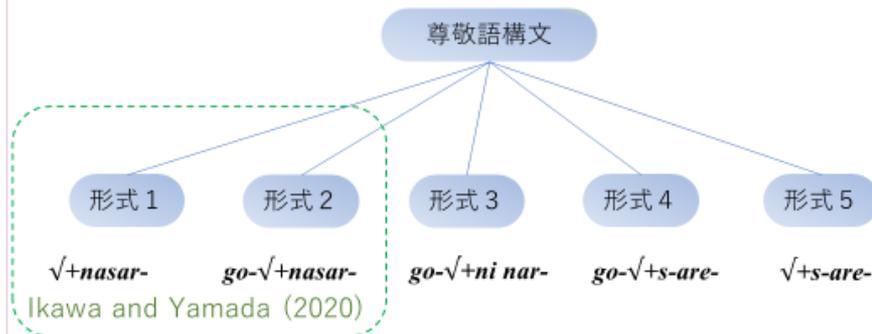
要因 1 **-0.95** ポイント

要因 2 **1.25** ポイント

要因 3 **3.25** ポイント

I はじめに：Variation

尊敬語構文



- (1)a. 先生が 到着 なさった。
b. 先生が ご到着 なさった。
c. 先生が ご到着 になった。
d. 先生が 到着 された。
e. 先生が ご到着 された。

2020/6/24

第415回LCCC研究会 Summer Special
競合する尊敬語構文と発話行為の割り当て

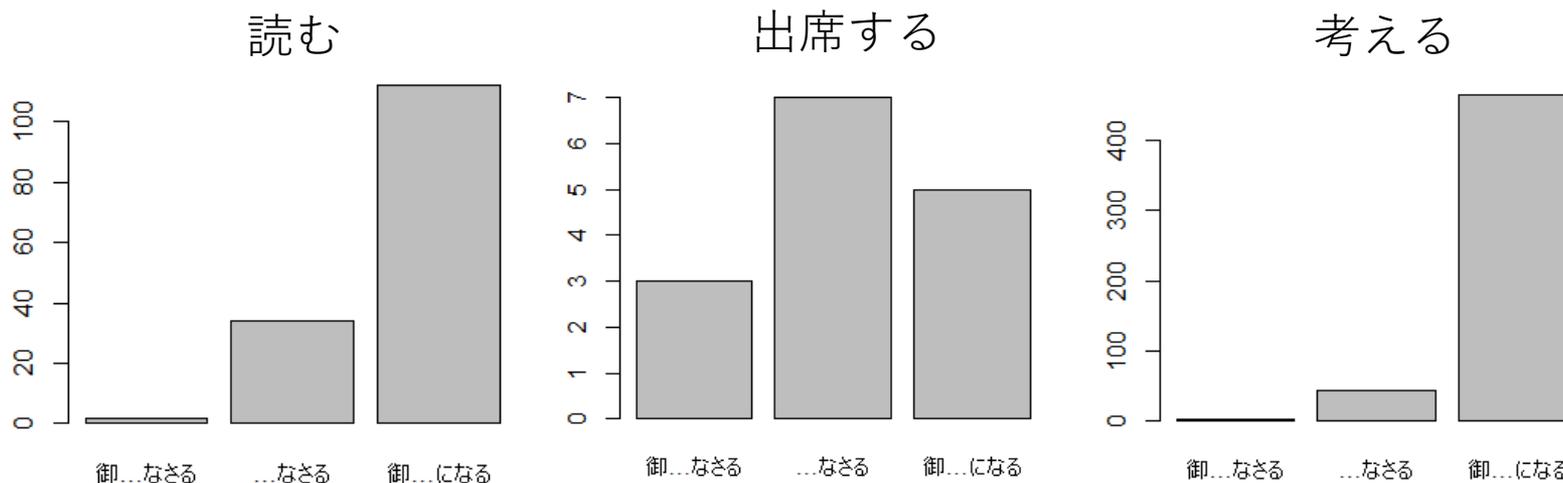
2

Section I 定量的探索

Corpus Data

前文脈	キー	後文脈
なかには中国ものとして『銀葉亭』を	お 読み になる	方もいらっしゃるわけです
マリア・ジョゼ皇太子妃が主催する晩餐会に	出席 なさっ	た。
あなたが元の会社の同僚の立場だったら、どう	お 考え になり	ますか？

相対頻度と散布図

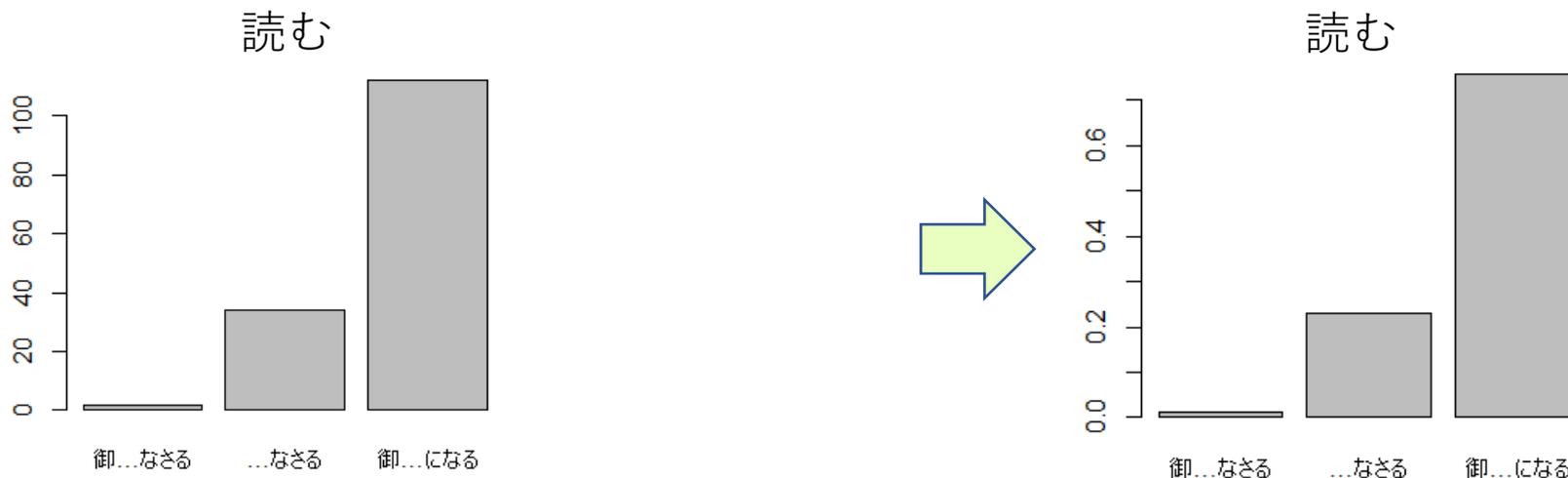


Section 1 定量的探索

Corpus Data

前文脈	キー	後文脈
なかには中国ものとして『銀葉亭』を	お 読み になる	方もいらっしゃるわけです
マリア・ジョゼ皇太子妃が主催する晩餐会に	出席 なさっ	た。
あなたが元の会社の同僚の立場だったら、どう	お 考え になり	ますか？

相対頻度と散布図

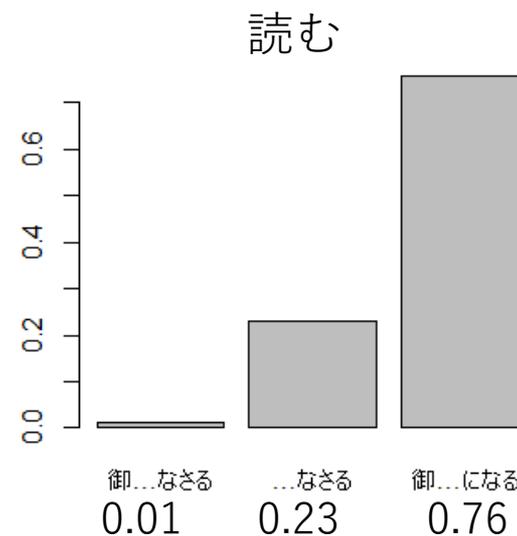
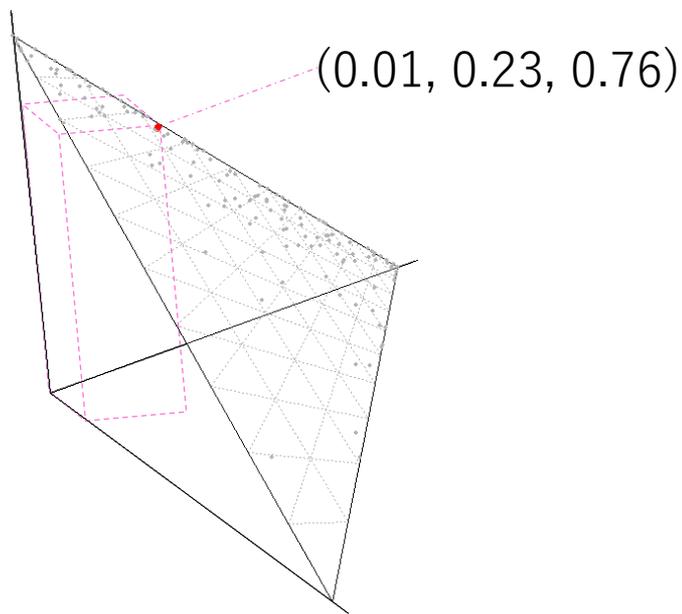


Section I 定量的探索

Corpus Data

前文脈	キー	後文脈
なかには中国ものとして『銀葉亭』を	お 読み になる	方もいらっしゃるわけです
マリア・ジョゼ皇太子妃が主催する晩餐会に	出席 なさっ	た。
あなたが元の会社の同僚の立場だったら、どう	お 考え になり	ますか？

相対頻度と散布図

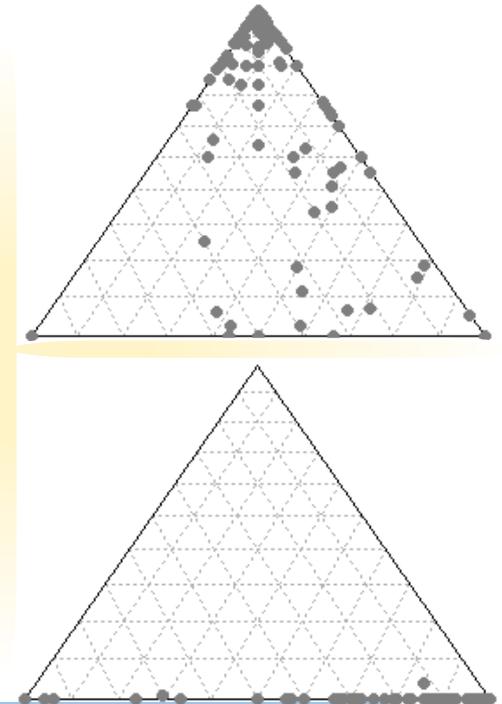
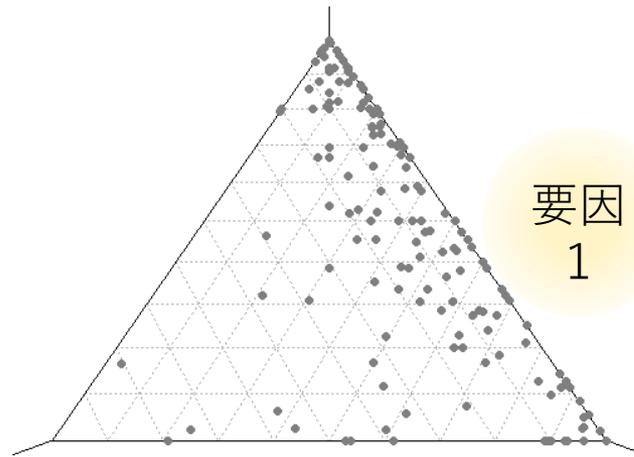
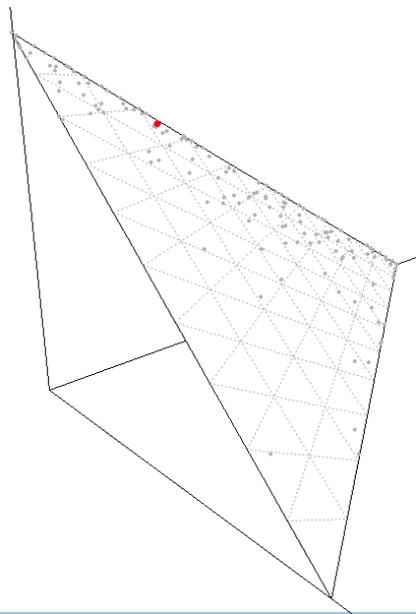


Section I 定量的探索

Corpus Data

前文脈	キー	後文脈
なかには中国ものとして『銀葉亭』を	お 読み になる	方もいらっしゃるわけです
マリア・ジョゼ皇太子妃が主催する晩餐会に	出席 なさっ	た。
あなたが元の会社の同僚の立場だったら、どう	お 考え になり	ますか？

言語学的要因を探す

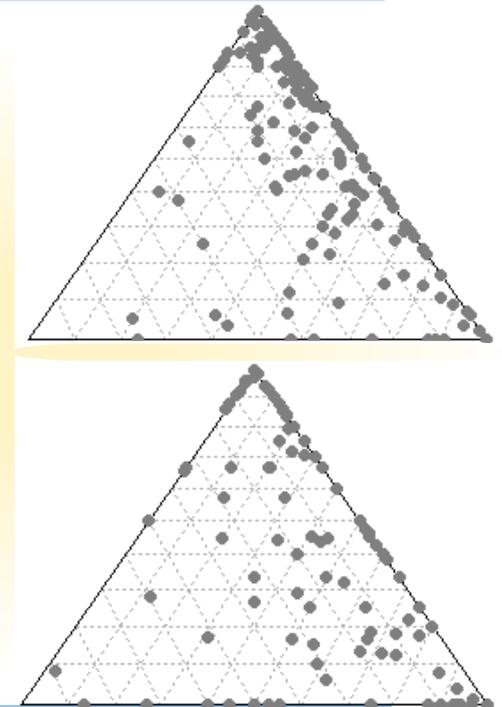
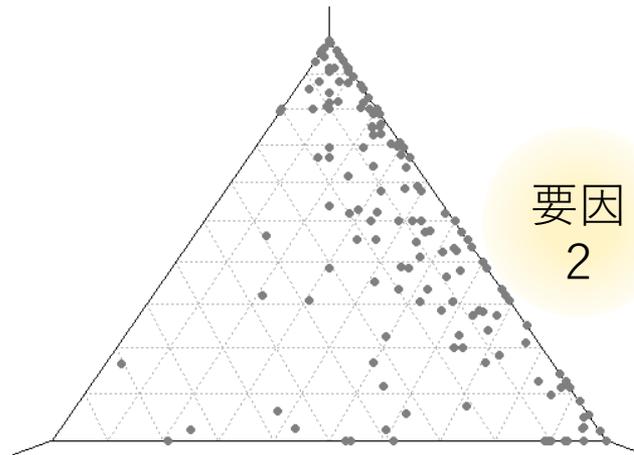
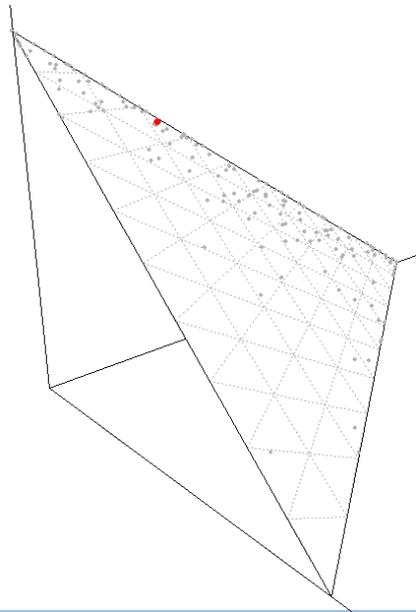


Section I 定量的探索

Corpus Data

前文脈	キー	後文脈
なかには中国ものとして『銀葉亭』を	お 読み になる	方もいらっしゃるわけです
マリア・ジョゼ皇太子妃が主催する晩餐会に	出席 なさっ	た。
あなたが元の会社の同僚の立場だったら、どう	お 考え になり	ますか？

言語学的要因を探す



Section I 定量的探索

多項ロジスティック混合効果モデルのベイズ推定

要因

W_1 : 語種 (漢語か否か)

W_2 : 連用形のモーラ数が1か否か

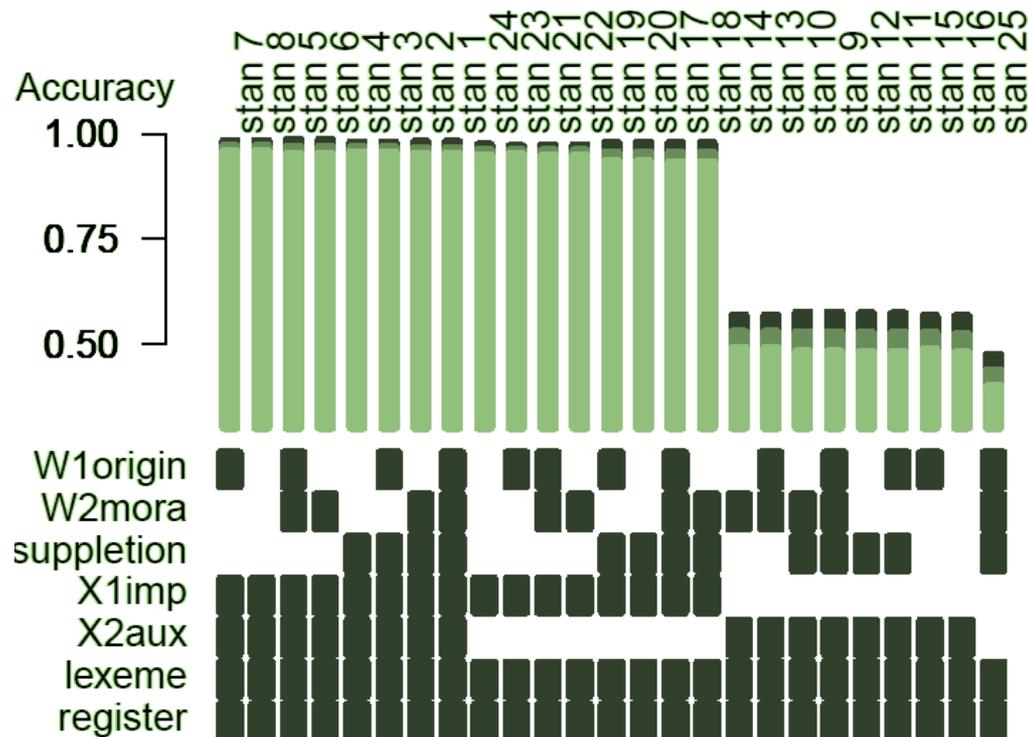
W_3 : 補充形 (suppletion)の有無

X_1 : 命令文か否か

X_2 : 補助動詞として使われているか否か

lexeme: 語彙素のバリエーション

register: レジスターのバリエーション

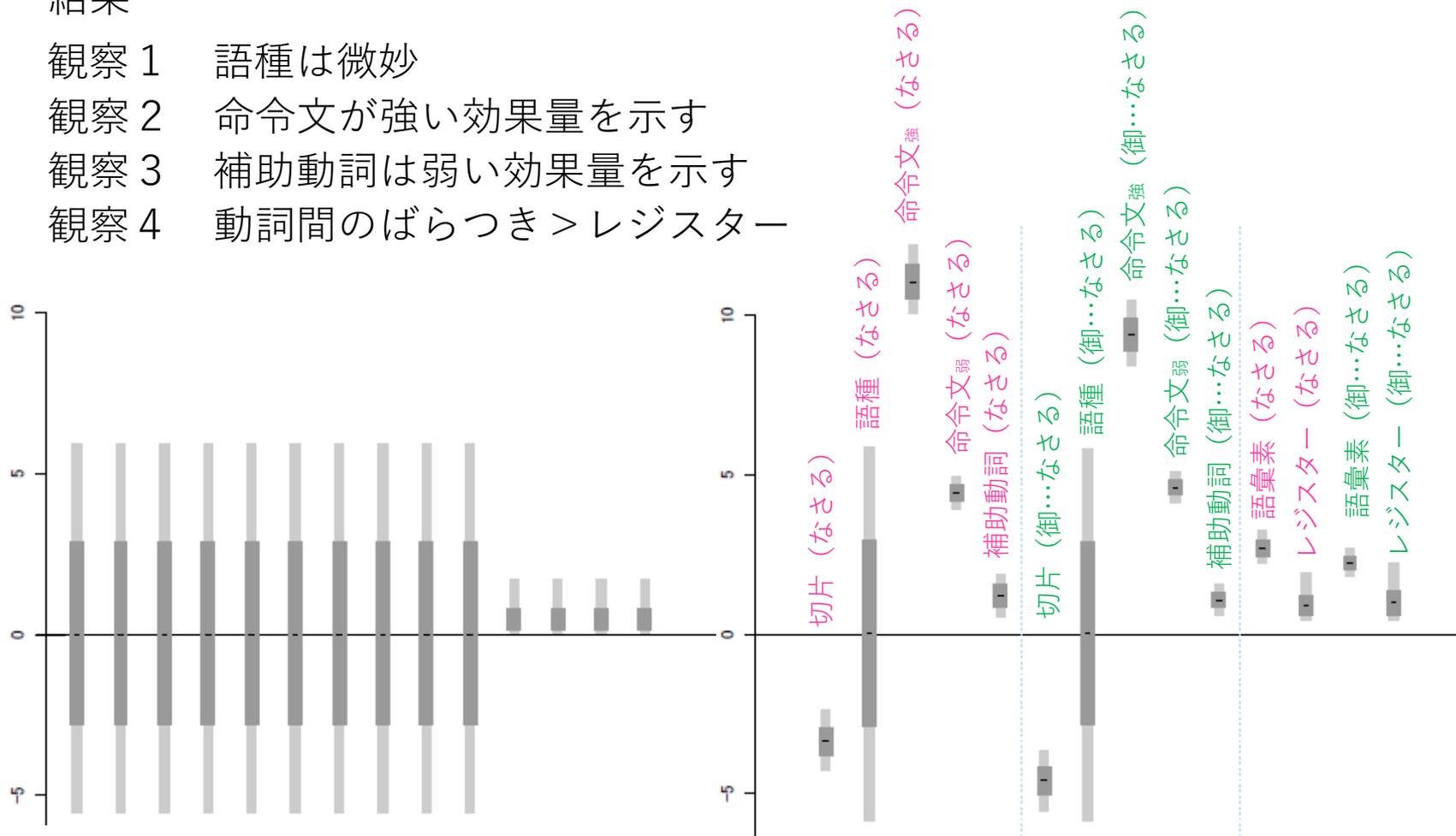


Section I 定量的探索

多項ロジスティック混合効果モデルのベイズ推定

結果

- 観察1 語種は微妙
- 観察2 命令文が強い効果量を示す
- 観察3 補助動詞は弱い効果量を示す
- 観察4 動詞間のばらつき > レジスター



Section I 定量的探索

定量的探索から定性的理論化へ

定量的な
探索的研究



構造的な
言語学的要因

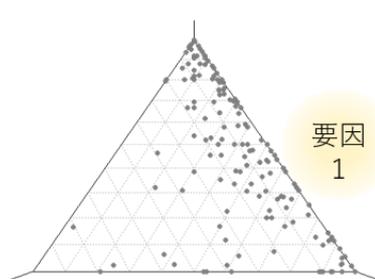
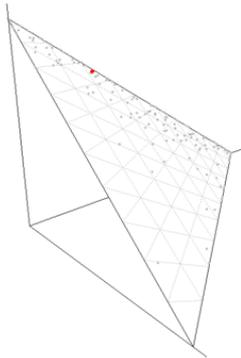


定性的な
理論言語学

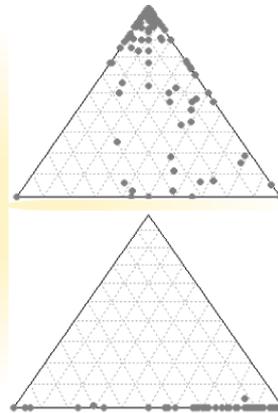


各語彙の持つ
独自性

言語学的要因を探す



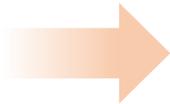
要因
1



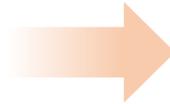
Section I 定量的探索

定量的探索から定性的理論化へ

定量的な
探索的研究



構造的な
言語学的要因

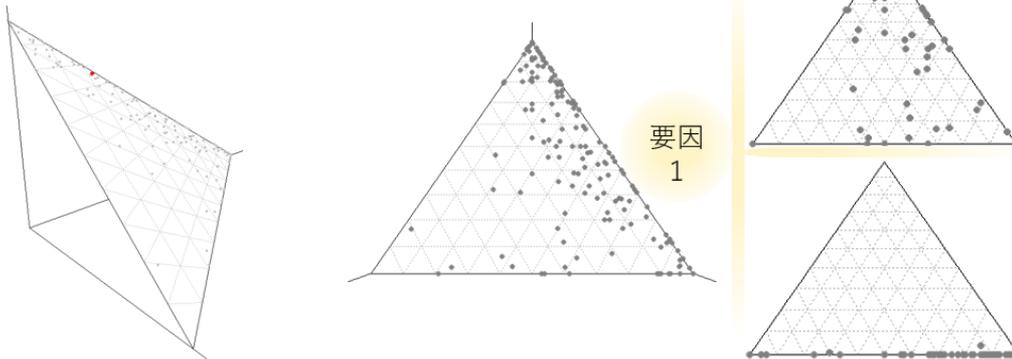


定性的な
理論言語学

命令文

各語彙の持つ
独自性 (Appendixへ)

言語学的要因を探す



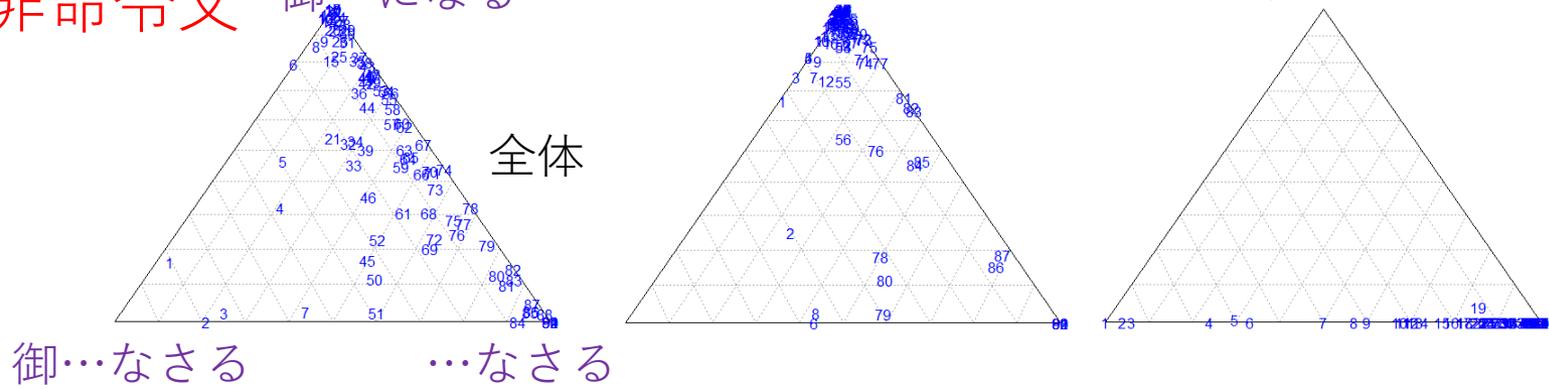
(Appendix: 舞台裏の統計学)

命令文と非命令文

御…になる

非命令文

命令文



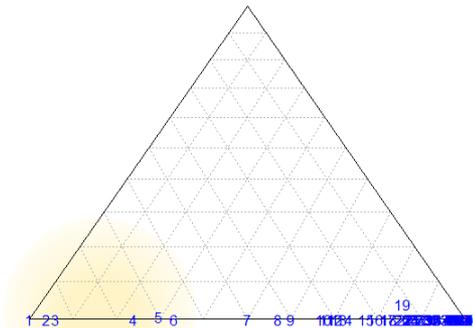
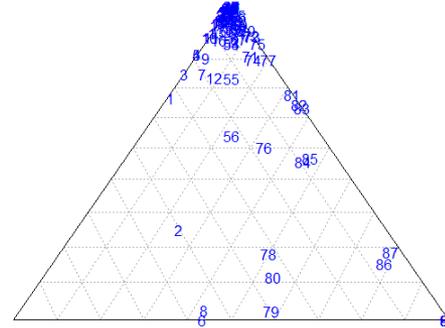
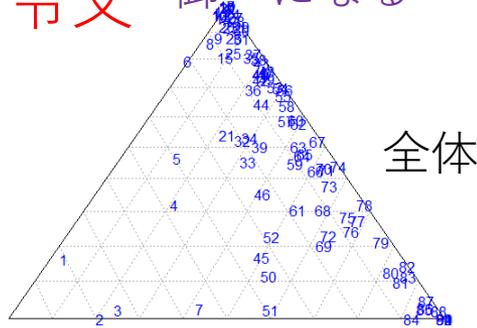
(Appendix: 舞台裏の統計学)

命令文と非命令文

御...になる

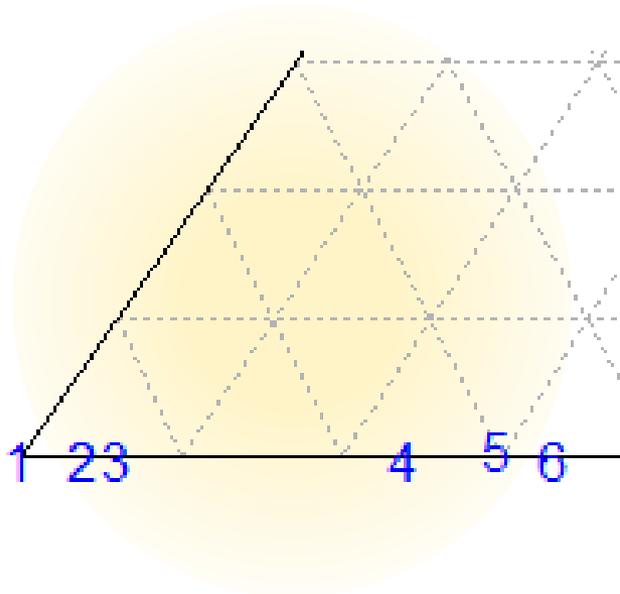
非命令文

命令文



御...なさる

...なさる



ID		御...なさる	...なさる	御...になる
1	出でる	13	0	0
2	休む	315	13	0
3	呉れる	32	2	0
4	止す	32	10	0
5	帰る	112	47	1
6	上がる	18	9	0

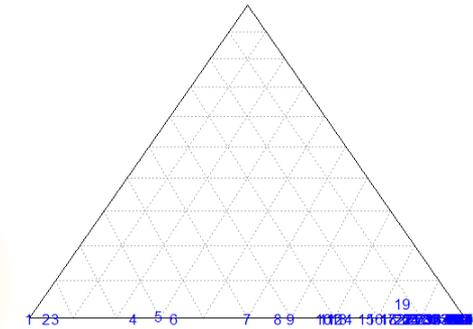
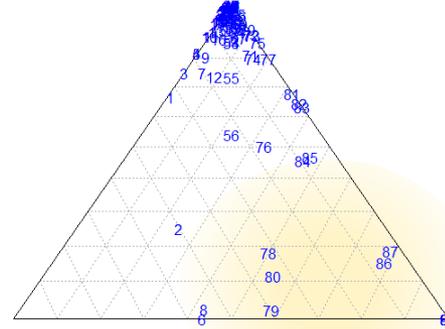
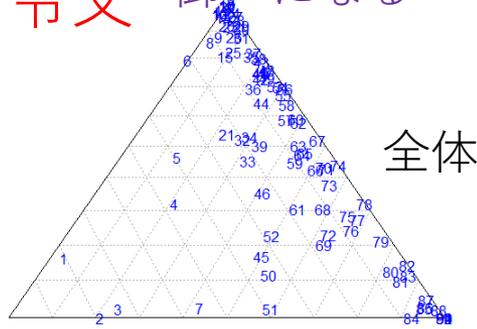
(Appendix: 舞台裏の統計学)

命令文と非命令文

御...になる

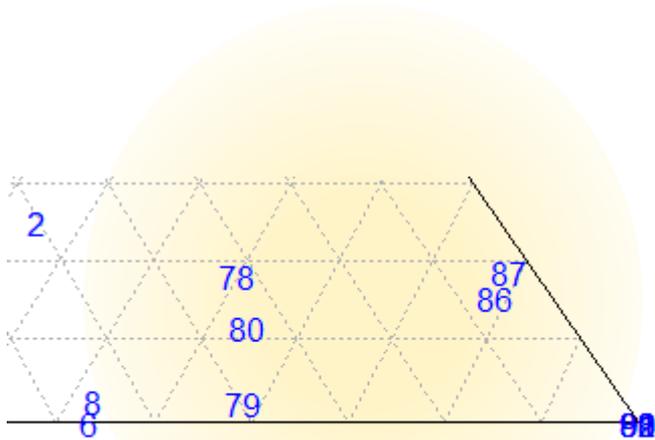
非命令文

命令文



御...なさる

...なさる



ID		御...なさる	...なさる	御...になる
6	呉れる	13	10	0
8	苦勞	22	17	1
78	相談	9	14	5
79	結婚	17	25	1
80	心配	24	38	8
86	言う	2	26	5
87	行く	1	30	7
88	為る	0	61	0
89	見る	0	54	0
90	来る	0	46	0

(Appendix: 舞台裏の統計学)

モーラ制約

御…なさる

苦勞

結婚

呉れる

相談

心配

答弁

利用

止す

言う

飲む

行く

出でる

指摘

寝る

休む

話す

待つ

取る

買う

許す

有る

捨てる

調べる

成る

立てる

食べる

付ける

なさる

御…になる

帰る

気付く

笑う

上がる

生まれる

座る

掛ける

入る

出掛ける

任せる

上げる

成る

立てる

食べる

付ける

泊まる

座る

開く

付く

認める

与える

買う

思ふ

作る

探す

出る

置く

解く

頑張る

見る

居る

来る

為る

越す

知る

召す

使う

答える

怒る

信ずる

起きる

置く

表わす

読む

受ける

考へる

見える

持つ

読む

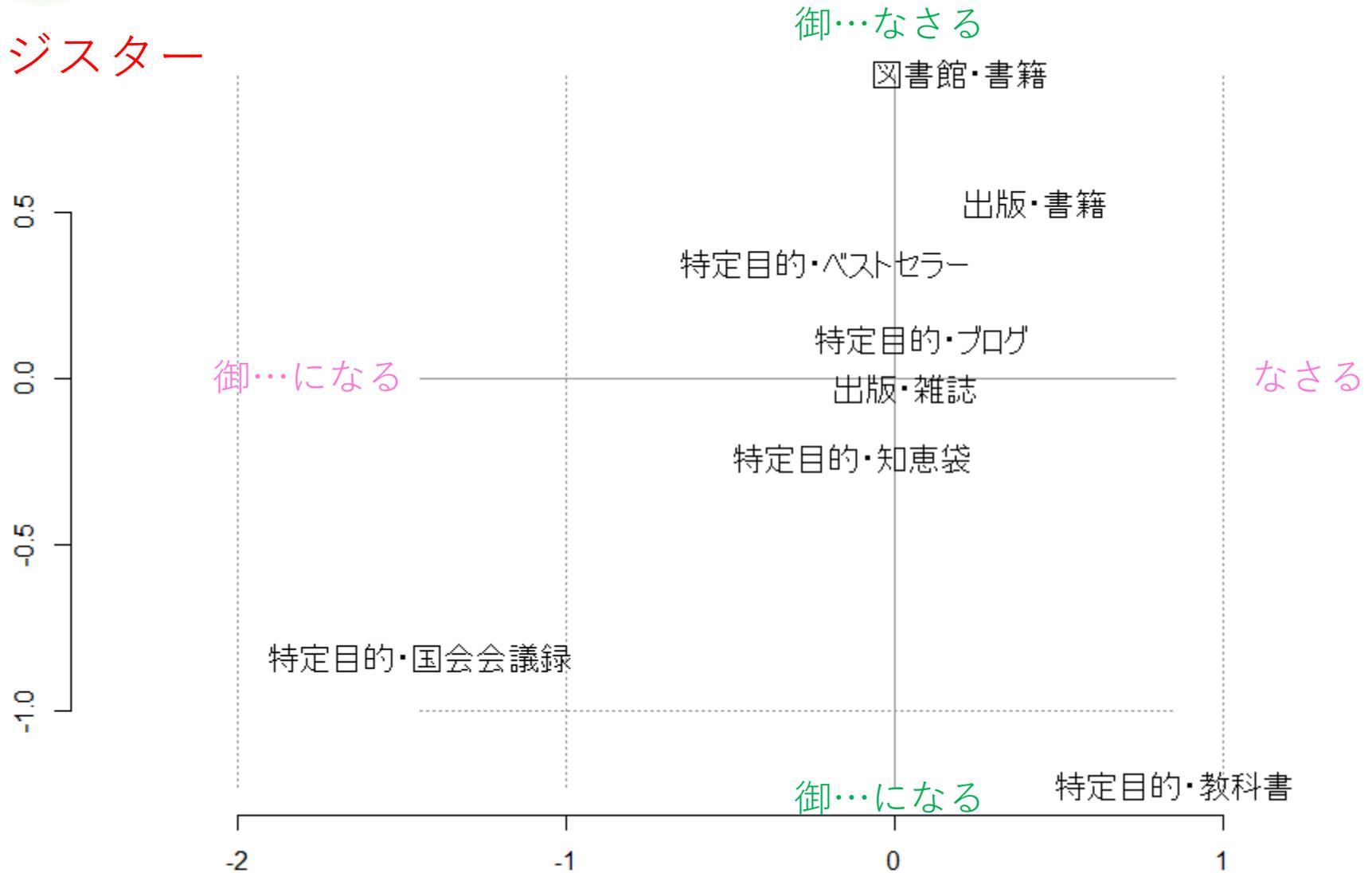
受ける

考へる

御…になる

(Appendix: 舞台裏の統計学)

レジスター



Section 2

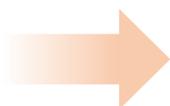
尊敬語の選択についての理論研究： 動的語用論

コーパス分析を通じて見つけた発見に基づいて
理論を構築する

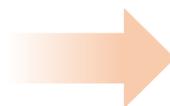
Section 2 動的語用論

定量的探索から定性的理論化へ

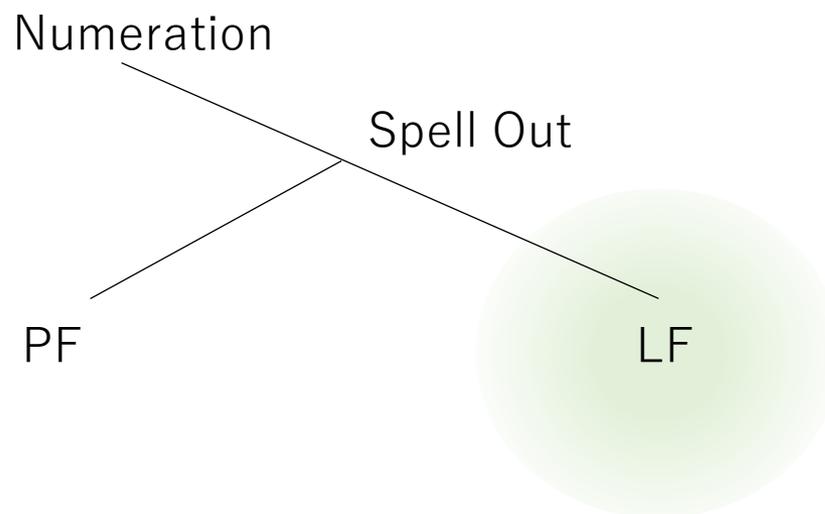
定量的な
探索的研究



構造的な
言語学的要因



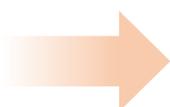
定性的な
理論言語学



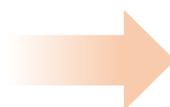
Section 2 動的語用論

リサーチクエスション 1

定量的な
探索的研究



構造的な
言語学的要因



定性的な
理論言語学

尊敬語は命令文と強い
インタラクションを示す

(1) 平叙文

- a. 先生は 解決策を 見つけなさった。
- b. Force: Assertion
- c. Respect: 主語

(2) 命令文

- a. 解決策を 見つけなさい。
- b. Force: Command
- ~~c. Respect: 主語~~

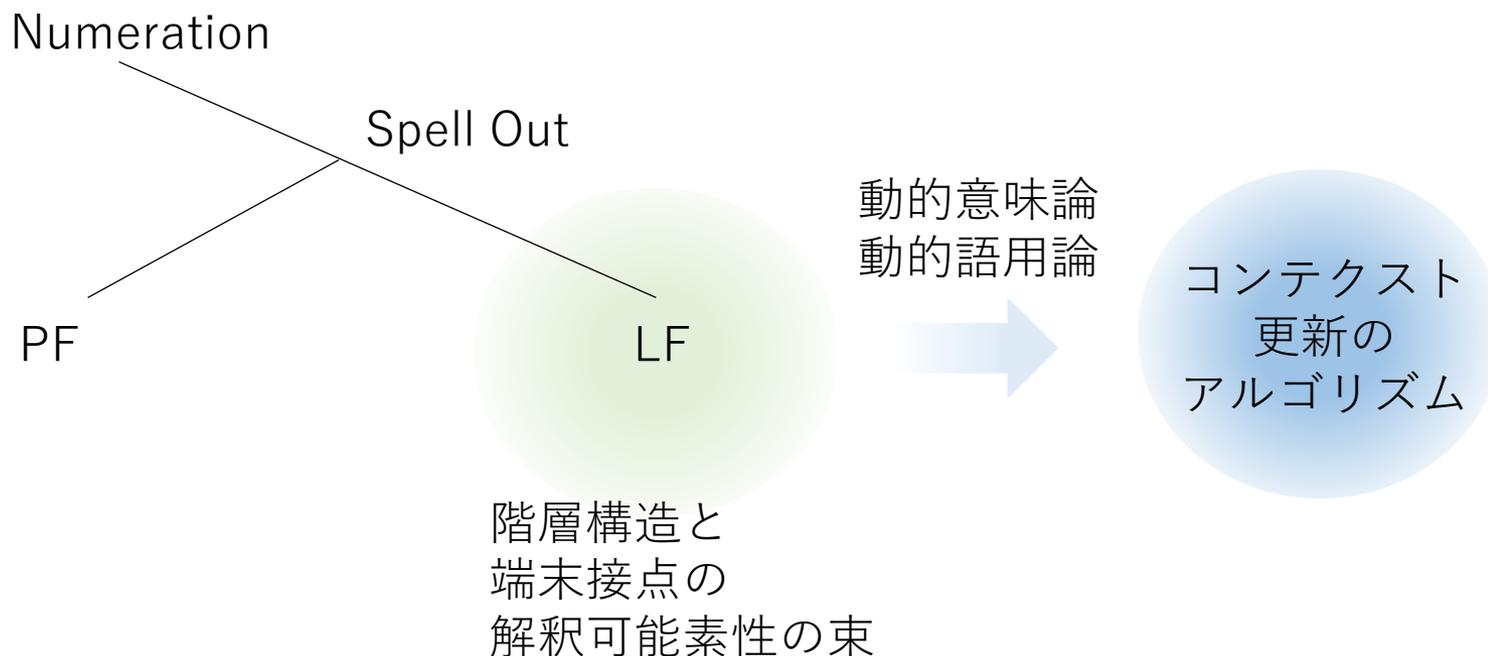
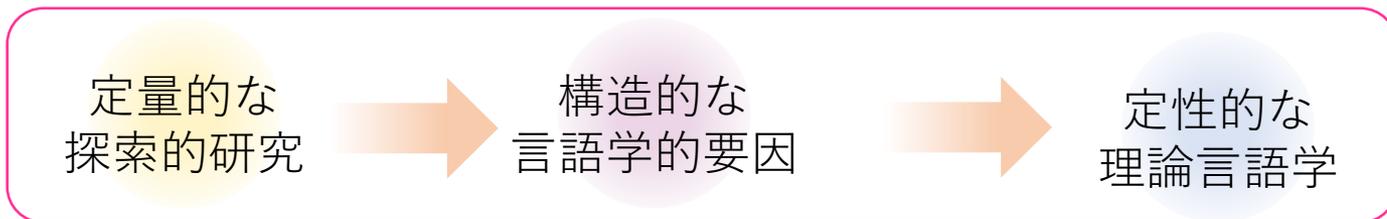
(3) [[HONs]]

- = $\begin{cases} \lambda p. p \bullet \text{the addressee is subordinate to the speaker (if it is in an imperative)} \\ \lambda p. p \bullet \text{the speaker respects the addressee (otherwise)} \end{cases}$

リサーチクエスション 1 条件付き denotation を提案せずに、かつ、 λ モデルを前提に、どのように尊敬語構文と命令形の関りをモデル化できるのだろうか？

Section 2 動的語用論

動的語用論 Dynamic Pragmatics



Section 2 動的語用論

動的語用論 Dynamic Pragmatics

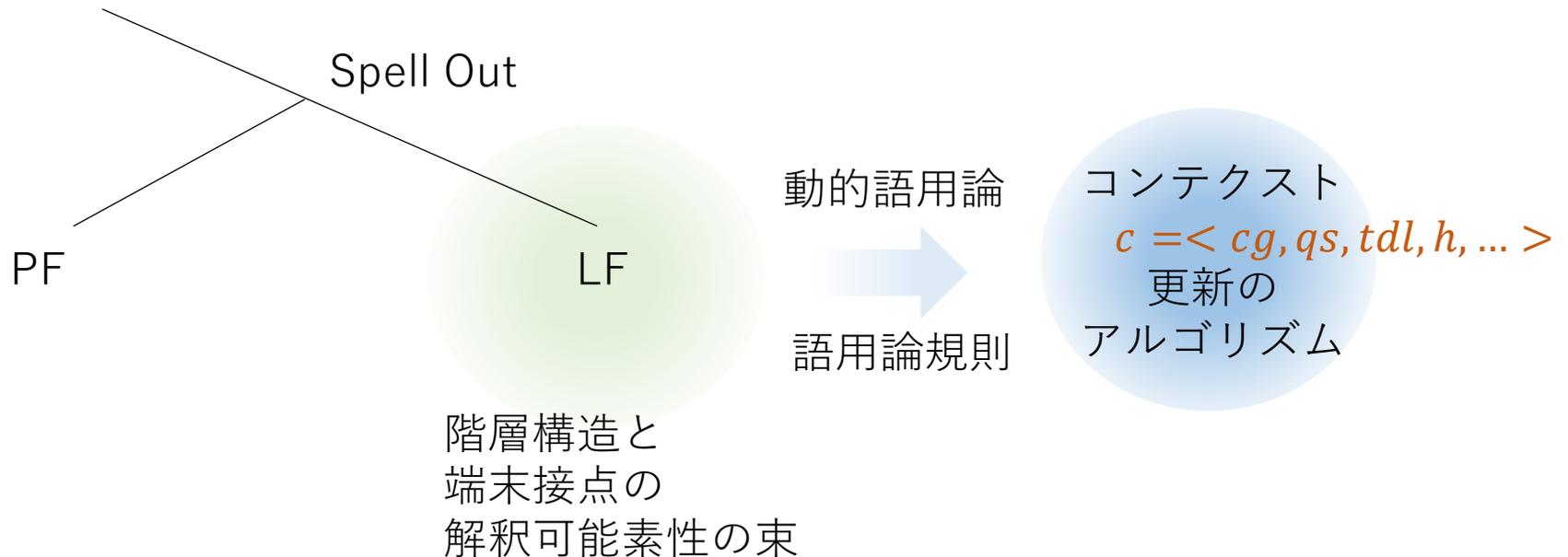
(4) Proponents

Stalnaker (1978), Gazdar (1981), Lewis (1979), Roberts (1996),
Portner (2004), Yamada (2019)

(5) Theoretical Assumptions

- a. Structured Discourse Context
- b. Pragmatic Rules: OT-driven

Numeration



Section 2 動的語用論

用語

Sentence type

Sentential force

- (6) a. Bond gives every fish to Loren.
 b. Does Bond give every fish to Loren?
 c. Give every fish to Loren, Bond!

Decl.
Interr.
Imp.

stating
asking
directing

- (7) a. Soldiers, march!
 b. Have some beer!
 c. Help me!

Imp.
Imp.
Imp.

directing
directing
directing

[COMMAND]
[OFFER]
[ENTREATY]

捉えたいこと：FormからIlloc Fへの写像

Illocutionary force

- (A) One-to-many
 (B) *One-to-any
 (C) 複数の文法形式と相互作用を持つ

Section 2 動的語用論

古典的発話行為論における発話行為の分解

Searle and Vanderveken (1985)

Rett (2011)

Zaefferer

Bach and Harnish (1979)

Force 

Illocutionary Point

Degree of Strength

Preparatory Condition ...

日本語命令形に関わる発話行為の類型

姫野 (1991, 1997)

森 (2010)

これらは、Searle派でいうところの Illocutionary Point をさらに分解したものと位置付けられる

行為指示表現		受益者	
		非聞き手	聞き手
決定権者	話し手	命令的指示	恩惠的指示
	聞き手	依頼	勧め

FORCE	HIERARCHY	BENEFICIARY	解決策を見つけなさい
(A) COMMAND	SP > HR	SP	✓
(B) ADVICE	SP > HR	HR	✓
(C) REQUEST	HR > SP	SP	
(D) SUGGESTION	HR > SP	HR	

Section 2 動的語用論

プロポーザル

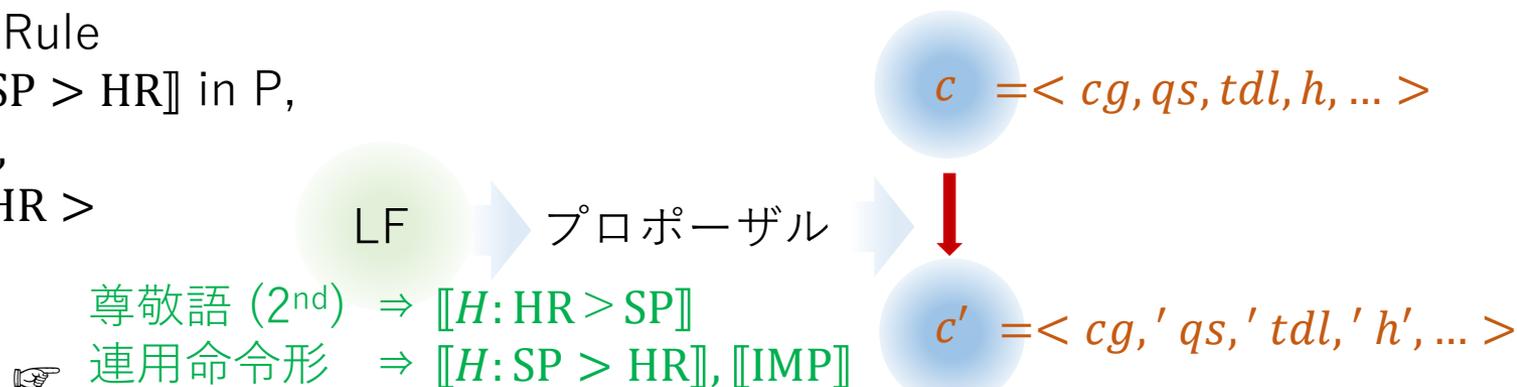
LFにおける解釈可能素性の中で、矛盾するCCPを提案するものがあつた場合、一度、ILLOCに対するプロポーザルを作り、コンテキストを更新する

(8) Pragmatic Rule

When $[[H: SP > HR]]$ in P,

$h \rightarrow h', s.t.,$

$h' = \langle SP, HR \rangle$



FORCE	HIERARCHY	BENEFICIARY	解決策を見つけなさい
(A) COMMAND	SP > HR	SP	✓
(B) ADVICE	SP > HR	HR	✓
(C) REQUEST	HR > SP	SP	
(D) SUGGESTION	HR > SP	HR	

Section 2 動的語用論

プロポーザル

LFにおける解釈可能素性の中で、矛盾するCCPを提案するものがあつた場合、一度、ILLOCに対するプロポーザルを作り、コンテクストを更新する

最適性理論

(9) 解決策を見つけなさい	IMP $[[H:SP > HR]]$ [[IMP]]	尊敬語 (2 nd) $[[H:HR > SP]]$ [[RES:<SP,HR>]]
☞ <(9), COMMAND>		*
☞ <(9), ADVICE >		*
<(9), REQUEST >	*!	
<(9), SUGGESTION >	*!	

FORCE	HIERARCHY	BENEFICIARY
(A) COMMAND	$[[H: SP > HR]]$	SP
(B) ADVICE	$[[H: SP > HR]]$	HR
(C) REQUEST	$[[H: HR > SP]]$	SP
(D) SUGGESTION	$[[H: HR > SP]]$	HR

Section 2 動的語用論

プロポーザル

LFにおける解釈可能素性の中で、矛盾するCCPを提案するものがあつた場合、一度、ILLOCに対するプロポーザルを作り、コンテクストを更新する

最適性理論

(10) 解決策を見つける	IMP $[[H:SP > HR]]$ [[IMP]]	尊敬語 (2 nd) $[[H:HR > SP]]$ [[RES:<SP,HR>]]
☞ <(10), COMMAND>		
☞ <(10), ADVICE >		
<(10), REQUEST >	*!	
<(10), SUGGESTION >	*!	

	FORCE	HIERARCHY	BENEFICIARY
(A)	COMMAND	$[[H: SP > HR]]$	SP
(B)	ADVICE	$[[H: SP > HR]]$	HR
(C)	REQUEST	$[[H: HR > SP]]$	SP
(D)	SUGGESTION	$[[H: HR > SP]]$	HR

Section 2 動的語用論

プロポーザル

LFにおける解釈可能素性の中で、矛盾するCCPを提案するものがあつた場合、一度、ILLOCに対するプロポーザルを作り、コンテクストを更新する

最適性理論

(11) 解決策を見つけ てくれ	受益 [[H:HR > SP]] [[BEN: SP]]	IMP [[H:SP>HR]] [[IMP]]	尊敬語 (2 nd) [[H:HR > SP]] [[RES:<SP,HR>]]
<(11), COMMAND>	*!		
<(11), ADVICE >	*!		
 <(11), REQUEST >		*	
<(11), SUGGESTION >	*!	*	

	FORCE	HIERARCHY	BENEFICIARY
(A) COMMAND		[[H: SP > HR]]	SP
(B) ADVICE		[[H: SP > HR]]	HR
(C) REQUEST		[[H: HR > SP]]	SP
(D) SUGGESTION		[[H: HR > SP]]	HR

Section 2 動的語用論

プロポーザル

LFにおける解釈可能素性の中で、矛盾するCCPを提案するものがあつた場合、一度、ILLOCに対するプロポーザルを作り、コンテクストを更新する

最適性理論

(12) 解決策を見つけ てください	受益 [[H:HR > SP]] [[BEN: SP]]	IMP [[H:SP>HR]] [[IMP]]	尊敬語 (2 nd) [[H:HR > SP]] [[RES:<SP,HR>]]
<(12), COMMAND>	*!		*
<(12), ADVICE >	*!		*
 <(12), REQUEST >		*	
<(12), SUGGESTION >	*!	*	

	FORCE	HIERARCHY	BENEFICIARY
(A) COMMAND		[[H: SP > HR]]	SP
(B) ADVICE		[[H: SP > HR]]	HR
(C) REQUEST		[[H: HR > SP]]	SP
(D) SUGGESTION		[[H: HR > SP]]	HR

Section 2 動的語用論

プロポーザル

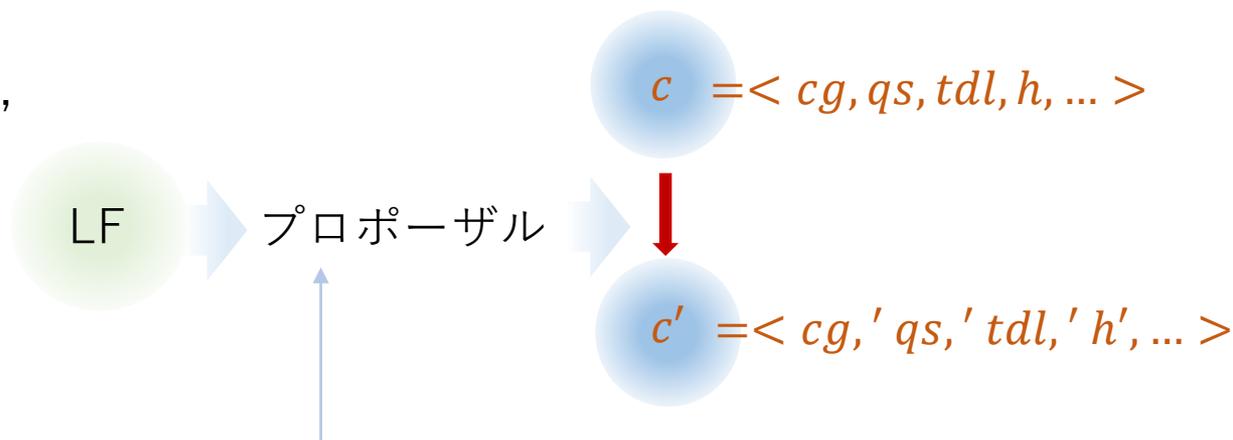
LFにおける解釈可能素性の中で、矛盾するCCPを提案するものがあつた場合、一度、ILLOCに対するプロポーザルを作り、コンテキストを更新する

(8) Pragmatic Rule

When $[[H:SP > HR]]$ in P,

$h \rightarrow h', s.t.,$

$h' = \langle SP, HR \rangle$



最適性理論

(9) 解決策を見つけなさい

IMP $[[H:SP > HR]]$ 尊敬語 (2nd) $[[H:HR > SP]]$
 $[[RES: \langle SP, HR \rangle]]$

☞ $\langle (9), \text{COMMAND} \rangle$

*

☞ $\langle (9), \text{ADVICE} \rangle$

*

$\langle (9), \text{REQUEST} \rangle$

*!

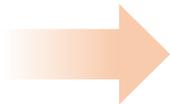
$\langle (9), \text{SUGGESTION} \rangle$

*!

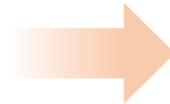
Section 2 動的語用論

リサーチクエスチョン 1

定量的な
探索的研究



構造的な
言語学的要因



定性的な
理論言語学

尊敬語は命令文と強い
インタラクションを示す

(1) 平叙文

- a. 先生は 解決策を 見つけなさった。
- b. Force: Assertion
- c. Respect: 主語

(2) 命令文

- a. 解決策を 見つけなさい。
- b. Force: Command
- ~~c. Respect: 主語~~

(3) [[HONs]]

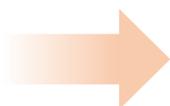
- = $\left\{ \begin{array}{l} \lambda p. p \bullet \text{the addressee is subordinate to the speaker (if it is in an imperative)} \\ \lambda p. p \bullet \text{the speaker respects the addressee (otherwise)} \end{array} \right.$

リサーチクエスチョン 1 条件付き denotation を提案せずに、かつ、 λ モデルを前提に、どのように尊敬語構文と命令形の関りをモデル化できるのだろうか？ **Yes! OT-based DP**

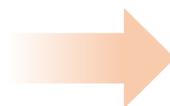
Section 2 動的語用論

リサーチクエスチョン2

定量的な
探索的研究



構造的な
言語学的要因



定性的な
理論言語学

尊敬語は命令文と強い
インタラクションを示す

(1) 平叙文

- a. 先生は 家に 帰り なさった。
- b. Force: Assertion
- c. Respect: 主語

(13) 平叙文

- a. 先生は 家に お帰り になった。
- b. Force: Assertion
- c. Respect: 主語

(2) 命令文

- a. 家に 帰り なさい。
- b. Force: Command
- ~~c. Respect: 主語~~

(14) 命令文

- a. 家に ~~お~~帰り になれ。
- b. Force: Command
- ~~c. Respect: 主語~~

リサーチクエスチョン2 なぜ、「御…になる」は命令形になれないのか？
先述の動的意味論の枠組みを維持したまま説明できるのか？

Section 2 動的語用論

仮説1 語源的な制約 (to be rejected)

「御…になる」は「なる」に由来する表現で、「なる」が命令形になれないのでそれと同じ理由で命令形になれないのだ。

(15) 反例

- a. かぼちやの馬車になれ。
- b. もうちょっと大人になれ/素直になれ/賢い人になれ/ …。

仮説2 ランキングの無指定

現代日本語には、二つの命令文を作る二つの形態素、すなわち、

- ①音声的な具現化を持つ-e/roと、 ⇔ ランキングが無指定
 - ②ゼロ形態素 ⇔ ランキングが指定
- のうち、前者は尊敬語と結びつけない。

Section 2 動的語用論

前提 二つの命令文

日本語の命令文には、二つのタイプがある。

(16) タイプ1：音声的具現形を持つもの

- a. 水を nom- $\{e/*ro\}$.
- b. 早く oki- $\{*e/ro\}$.

この「タイプ1」の命令形は、江戸時代には尊敬語や受益表現とともに用いることができ（一部レジスターに化石化している）が、現代日本語では非生産的。

(17) タイプ2：Bare Imperatives

- a. 話し nasar-e. (Edo-period Japanese)
- b. 話し nasai. (Contemporary Japanese)
- c. 話して kure-ro. (Edo-period Japanese)
- d. 話して kure. (Contemporary Japanese)
- e. 話して kudasar-e. (Edo-period Japanese)
- f. 話して kudasai. (Contemporary Japanese)
- g. *お話しに nar-e. (存在していない) (Edo-period Japanese)

「タイプ1」の命令形は、江戸時代にはCOMMAND/ADVICE以外のFORCEも可。しかし、現在ではSP>HRの場合のみに特化した。森(2010), 山田 (2015)

Section 2 動的語用論

ルート依存の制約

語用論的制約は、ルートにも依存する。制約のランキングが無指定のものがある。

最適性理論

(18) 解決策を見つけなさい

	$-\emptyset$ $[[H:SP > HR]]$ [[IMP]]	尊敬語 (2 nd) $[[H:HR > SP]]$ [[RES:<SP,HR>]]
☞ <(18), COMMAND>		*
☞ <(18), ADVICE >		*
<(18), REQUEST >	*!	
<(18), SUGGESTION	*!	

FORCE >	HIERARCHY	BENEFICIARY
(A) COMMAND	$[[H: SP > HR]]$	SP
(B) ADVICE	$[[H: SP > HR]]$	HR
(C) REQUEST	$[[H: HR > SP]]$	SP
(D) SUGGESTION	$[[H: HR > SP]]$	HR

Section 2 動的語用論

ルート依存の制約

語用論的制約は、ルートにも依存する。制約のランキングが無指定のものがある。

最適性理論

(19) 解決策をお見つけになれ	-e/ro $[[H:SP > HR]]$ [[IMP]]	尊敬語 (2 nd) $[[H:HR > SP]]$ [[RES:<SP,HR>]]
<(19), COMMAND>		*!
<(19), ADVICE >		*!
<(19), REQUEST >	*!	
<(19), SUGGESTION >	*!	

	FORCE	HIERARCHY	BENEFICIARY
(A) COMMAND		$[[H: SP > HR]]$	SP
(B) ADVICE		$[[H: SP > HR]]$	HR
(C) REQUEST		$[[H: HR > SP]]$	SP
(D) SUGGESTION		$[[H: HR > SP]]$	HR

Section 2 動的語用論

予測

「れる尊敬」は、「御…になる」と同じ振る舞いをするはず。

最適性理論

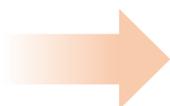
(20) 解決策を見つけられ	-e/ro $[[H:SP > HR]]$ [[IMP]]	尊敬語 (2 nd) $[[H:HR > SP]]$ [[RES:<SP,HR>]]
<(20), COMMAND>		*!
<(20), ADVICE >		*!
<(20), REQUEST >	*!	
<(20), SUGGESTION >	*!	

FORCE	HIERARCHY	BENEFICIARY
(A) COMMAND	$[[H: SP > HR]]$	SP
(B) ADVICE	$[[H: SP > HR]]$	HR
(C) REQUEST	$[[H: HR > SP]]$	SP
(D) SUGGESTION	$[[H: HR > SP]]$	HR

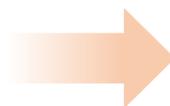
Section 2 動的語用論

リサーチクエスチョン2

定量的な
探索的研究



構造的な
言語学的要因



定性的な
理論言語学

尊敬語は命令文と強い
インタラクションを示す

(1) 平叙文

a. 先生は 家に 帰りなさった。

b. Force: Assertion

c. Respect: 主語

(13) 平叙文

a. 先生は 家に お帰りになった。

b. Force: Assertion

c. Respect: 主語

(2) 命令文

a. 家に 帰りなさい。

b. Force: Command

~~c. Respect: 主語~~

(14) 命令文

a. 家に ~~お~~帰りになれ。

b. Force: Command

~~c. Respect: 主語~~

リサーチクエスチョン2 なぜ、「御…になる」は命令形になれないのか？
先述の動的意味論の枠組みを維持したまま説明できるのか？

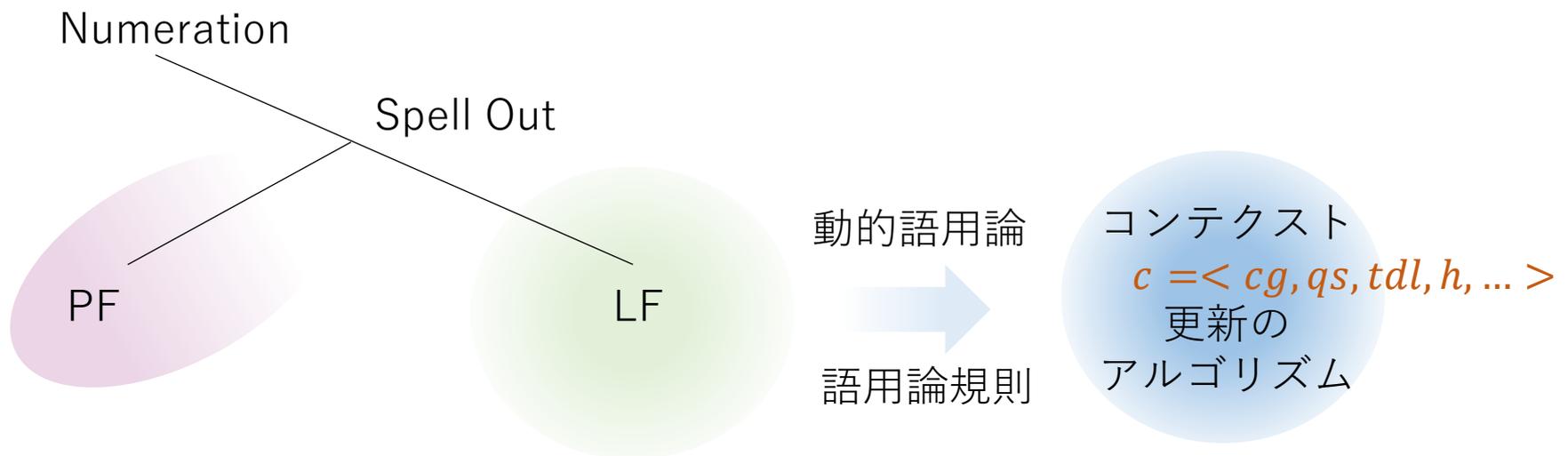
➡ **-eが尊敬語と結びつけないため。語用論制約のランキングの無指定に起因。**

Section 2 動的語用論

ルート依存の制約

語用論的制約は、ルートにも依存する。制約のランキングが無指定のものがある。

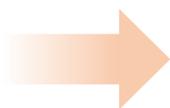
Cophonology



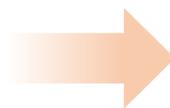
Section 2 動的語用論

リサーチクエスチョン 1

定量的な
探索的研究



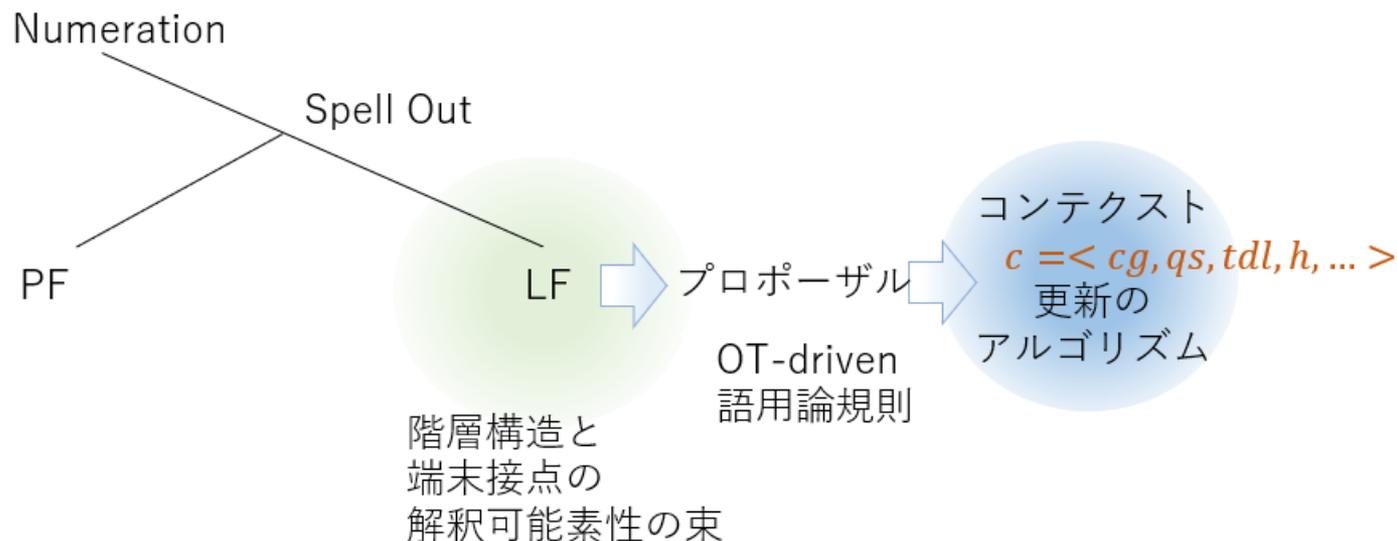
構造的な
言語学的要因



定性的な
理論言語学

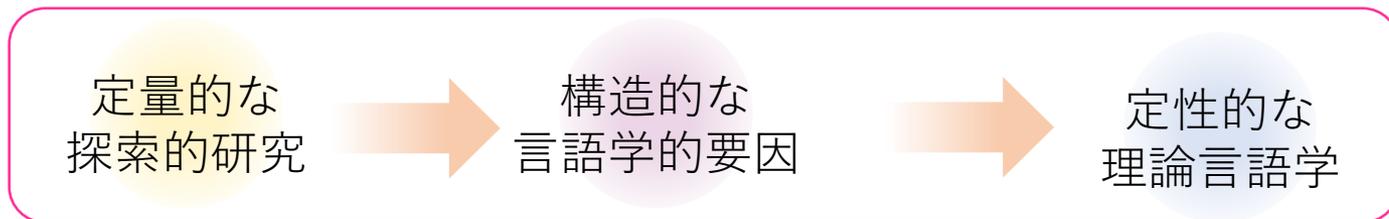
尊敬語は命令文と強い
インタラクションを示す

理論的示唆：動的語用論の新展開



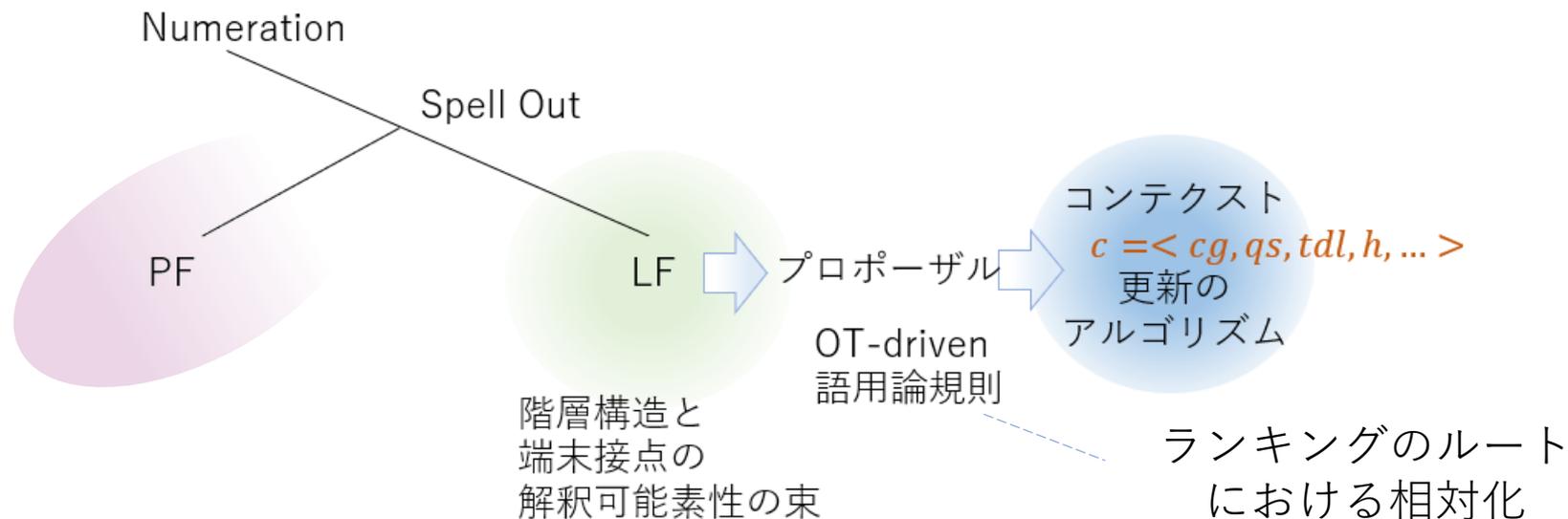
Section 2 動的語用論

リサーチクエスチョン2



尊敬語は命令文と強い
インタラクションを示す

理論的示唆：動的語用論の新展開



Section 2 動的語用論

残された課題

A. 尊敬語関係

問1：平叙文と命令文の形態統語構造は同じ？（和語）

(21) ?論文を 書きなされた。

(22) 論文を 書きなさい。

(菊地1997; Yamada 2019)

問2：平叙文と命令文の形態統語構造は同じ？（漢語）

(23) 論文を 投稿なされた。

(24)a. ?論文を 投稿 なさい。

b. 論文を 投稿しなさい。

問3：接頭辞が付くだけの連用形

(25)a. * 走り！

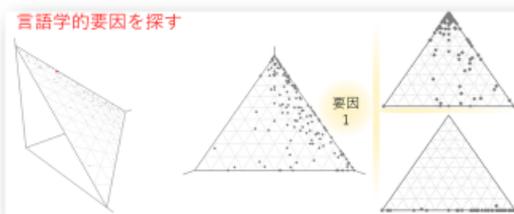
b. お走り！

問4：さらなる語彙素の特殊性

(⇒10月 DHラボ)

Section 1 定量的探索

定量的探索から定性的理論化へ



2020/6/24

第415回LCCC研究会 Summer Special
競合する尊敬語構文と発話行為の割り当て

17

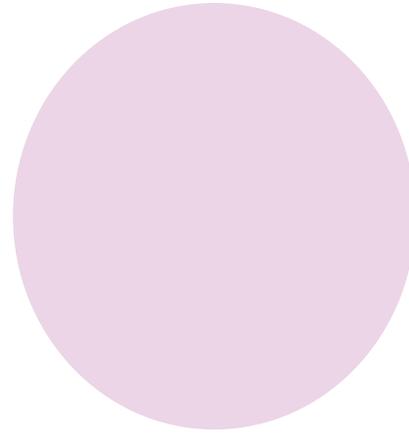
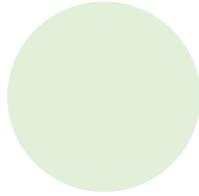
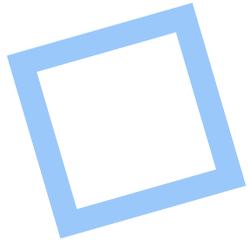
Section 2 動的語用論

残された課題

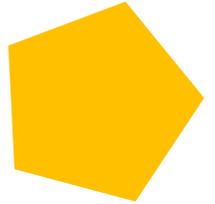
B. 動的語用論

問5：ほかに、プロポーザルが必要な現象はないか？

- (26) a. 証拠性表現? (Murray and Starr, to appear)
b. タイ語の敬語 (McCready 2014, 2019)



ご清聴ありがとうございました。



参考文献

- Alok, D (to appear) The Morphosyntax of Magahi Addressee Agreement. Manuscript.
- Bach, K. and Harnish, R. M. (1979) *Linguistic Communication and Speech Acts*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Gazdar, G. (1981) Speech act assignment. In *Elements of discourse understanding*, ed. by Joshi, A. K., Sag, I. A., Webber, B., 64-83. New York: Cambridge University Press.
- Ikawa, S. and Yamada, A. (2020) A hybrid approach to honorific agreement: a sprouted valued feature and an unvalued probing feature. Presented at CLS 56.
- Kim, J. and Sells, P. (2007) Korean honorification: a kind of expressive meaning. *Journal of East Asian Linguistics* 16(4), 303-336.
- Lewis, D. K. (1979) Scorekeeping in a language game. *Journal of Philosophical Logic*, 8(1), 339-359.
- McCready, E. (2014) A semantics for honorifics with reference to Thai. *Proceedings of Pacific Asia Conference on Language, Information and Computing (PACLIC)* 28, 503-512.
- McCready, E. (2019) *Honorification and social meaning*. New York: Oxford University Press.

参考文献

- Murray, S. E., and Starr, W. B. (to appear) The structure of communicative acts, Manuscript.
- Nevins, A., and Parrott, J. K. (2010) Variable rules meet impoverishment theory: Patterns of agreement leveling in English varieties. *Lingua* 120, 1135-1159.
- Portner, P. (2004). The semantics of imperatives within a theory of clause types. *Proceedings from Semantics and Linguistic Theory* 14, 235-252.
- Rett, J. (2011). Exclamatives, degrees and speech acts. *Linguistics and Philosophy*, 34(5):411-42.
- Roberts, C. (2012 [1996]) Information structure in discourse: towards an integrated formal theory of pragmatics. *Semantics and Pragmatics* 5(6), 1-69.
- Searle, J. R. and Vanderveken, D. (1985) *Foundations of Illocutionary Logic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Stalnaker, R. C. (1978) Assertion. In *Syntax and Semantics 9: pragmatics*, ed. by Cole, P., 315- 332. New York : Academic Press.
- Yamada, A. (2019) *The syntax, semantics and pragmatics of Japanese addressee-honorific markers*. Georgetown University, PhD Thesis.
- Zaefferer, D. (2007). Deskewing the Searlean picture: A new speech act ontology for linguistics. *The Proceedings of Berkeley Linguistics Society* 32 (1), 453-464.
-

参考文献

菊地康人(1997 [1994])『敬語』東京: 講談社.

姫野伴子(1991)「依頼と勧誘 受益者表現の日英対照研究を中心に」『世界の日本語教育』1巻, 69-81.

姫野伴子(1997)「行為指示型発話行為の機能と形式」『埼玉大学紀要教養学部』33巻1号. 169-178.

森勇太 (2010)「行為指示表現の歴史的変遷」『日本語の研究』第6巻2号, 78-92.

山田里奈 (2015)『近世後期江戸語から明治期東京語における尊敬表現研究』早稲田大学, 博士論文.